

3 「ちょうえんぼう」について

旧地権者及び古くから住む周辺住民の話では、第5次調査区の場所は「ちょうえんぼう」、「ちょうえんぼうの畠」と呼ばれ、「昔、南側に湧き水があり、ちょうえんぼうというお坊さんがいた。」と伝わっている。また「ちょうえんぼうは北から来た。」という話もあるという。今のところ、本遺跡及びその近隣の発掘調査で、寺院跡や僧坊跡、仏具等は見つかっていない。この「ちょうえんぼう」について、文献史料等から推測できることを以下にまとめた。

(1) 八戸市の地名

インターネットで「ちょうえんぼう」と検索すると、青森県八戸市河原木大字「長円坊堀（ちょうえんぼうぼり）」という地名がヒットする。八戸市立図書館によれば、地名の由来は不明で近くの祠を管理した修験者の名の可能性がある、とのことであった。

(2) 「ちょうえんぼう」とは

神田より子著『東北地方における修験者と権現舞』、青森県立図書館『多聞院文書』には、「漆水村 長円坊」、「32 五戸神明別当 長円坊」と見える。

また、『内史署(1)前六』「奥南旧記抜率卷之三 寺社修験本末支配之記」には、「十七自光坊」内に「田名部自光坊末流 一 長円坊 長後村」、「二〇寿松院」内に「寿松院末流 一 長円坊 腹帶村」、「一 長円坊 和井内村」、「二一西福院」内に「西福院末流御城下住居 一 長円坊 山伏小路」と、長円坊が散見される。これらのことから「ちょうえんぼう」は、修験関係にしばしば見られる名称のひとつといえる。

(3) 土地の行政区分

第5次調査区の地番は、盛岡市永井 25 地割であり、旧字名は荒屋、近世期は向中野通永井村に属していた。本遺跡南隣接地の地番は、西見前 19 地割であり、旧字名は菖蒲田(あやめだ)、近世期は見前通西見前村に属していた。また第5次調査区西隣民家の現住所は、昔からの地縁があることから、飛び地の西見前 19 地割である。第5次調査区旧地権者は西見前在住でもあり、土地の歴史を考える上では永井よりも西見前との関係性が深いといえる。なお明治 22 年の町村制により、飯岡村永井、見前村西見前となる。昭和 30 年には乙部村と共に 3 村合併し都南村となり、平成 4 年に盛岡市に編入合併し現在に至る。

(4) 北野神社別当宮崎家

都南歴史民俗資料館に残る昭和 63 年の都南村文化財調査員調査報告に、次の記録がある。

長園坊（宮崎家）跡と伝えられる 昭和六三 十一 四 吉田長一郎

都南村下永井二十五-四五藤川与次郎氏宅前五千平方メートル余、昔より長園坊跡地と伝えられ宮崎家の修験道場があったと言われ、今も土地の人々は、その土地を「ちょうえんぼう」と言っております。

吉田長一郎氏は都南村文化財調査員を務め、村内各地の歴史を調査し記録した。上記報告には現地写真が添えられ、本遺跡第3・5次調査区周辺が写っている。宮崎家の修験道場があったと記されているがその根拠等は、吉田氏の記録に無く不明である。

宮崎家は、西見前の北野神社の別当職（統括者）を代々務めた家系である。

北野神社は、西見前第 17 地割三百刈田地内に所在し、明治時代から終戦前まで社格は村社であった。はつきりとした由緒は不明だが、都南歴史民俗資料館の『神社佛閣由緒世代書上帖 志和郡年行司自光坊同行 賴光院』などの資料によれば、永正 2 (1502) 年に亡くなった賴光院の創建と伝わる。慶長 12 (1607) 年銘のある懸仮や、数枚の堂宇再建棟札が残るという。懸仮には「北野大明神奥州南部志和郡見前村別当教学院 鑄物師

茂平治作 施主郷中 慶長十二丁未歳五月二十三」(下線筆者加筆)の銘がある。懸仏銘に見える教学院は、『神社佛閣由緒世代書上帖』によれば第五世教学院巡直である。また第八世教学院巡永は、元禄 11(1699)年に自光坊六世秀山の弟子となり南覚坊を名乗り、その後教学院となる。正徳元(1709)年に自光坊秀山から代々縄張りとしてきた見前村・永井村を霞場(かすみば・修験道信者をまとめる縄張り)とする証文を受けた。

自光坊は代々同名を襲名し、江戸時代中頃には盛岡・志和・田名部・鹿角に霞場を有し、53 の末院(末派修験)を擁し、盛岡藩筆頭年行事(頭役)を務めた。元禄 2(1689)年からは、藩内の本山派も羽黒派も含めた修験最高責任者の修験惣録を務め、明治期の神仏分離まで藩内修験道の最高権力者だった。

修験道は自然崇拜・山岳信仰を基盤とし、仏教(密教)などが融合し、平安時代後期に宗教形態になったと言われる。中世末から近世初期にかけて、修験者は村や町に定着し霞や檀那場と呼ばれる縄張りをもった。盛岡藩領には千人以上の修験者がおり、庶民が有力な信徒だったという。盛岡藩の社堂を網羅した『御領分社堂』(宝暦 10(1760)年頃成立)によれば、江戸時代中期の領内社堂の約 8 割が修験持ちや俗別当(神仏習合から明治維新まで、村の社堂を管理する有力者の別当を、百姓身分で務めた者。)持ちである。俗別当の多くは修験者の流れをくみ、堂守となり、祈祷やまじないなどをする庶民に身近な宗教者だった。当時の社会において、修験は相当の影響力を持っていましたことがうかがえる。

江戸時代の北野神社別当宮崎家は、自光坊配下として永井村と見前村を霞場とした地域有力者だった。明治元年の神仏分離、同 5 年の修験道廃止により神職になった第 15 世宮崎求馬が、北野神社のほか永井の多賀神社など 15 ほどの神職を兼職したことからもうかがえる。しかし、『神社佛閣由緒世代書上帖』等資料には、ちょうえんぼうの名は見られない。記録に無い兄弟や関係者、呼び寄せた修験者にちょうえんぼうがいた可能性もあるが、確認できない。

(5) この土地に伝わる「ちょうえんぼう」とは

この土地に伝わるちょうえんぼうには、北野神社別当宮崎家関係も含め、いくつかの可能性が考えられる。

本遺跡から約 250m 北の永井第 24 地割地内に、「多賀神社」がある。多賀神社は江戸時代には向中野通永井村に位置し、明治時代から終戦前まで旧飯岡村村社であった。由来ははっきりしないが盛岡藩士阿部兵部左衛門の創祀と伝わり、永井村の産土神として尊信を集めたという。『御領分社堂』によれば、清九郎が代々俗別当を務めた。代々の清九郎に、ちょうえんぼうを名乗る修験者がいたかは不明だ。(後述の菖蒲田家 2 代清助の四男清九郎が東見前石田に分家している。以降系図は不明で多賀神社との関係性も不明。)

本遺跡から約 600m 南の西見前第 17 地割地内に、曹洞宗の「朝前山 清水寺」がある。『御領分社堂』に清水寺の寺院持ち社堂として「白山大權現」がみえる。清水寺は別当寺であるため、寺院領内に修験僧坊が存在した可能性がある。寺社領は境内近くだけでなく、離れて所在する場合もある。『清水寺史』によれば、慶応元(1865)年『當宗門改書上帳』の西見前村・東見前村の筆頭に「清水寺 曹洞宗 清助」の名前が見える。都南歴史民俗資料館蔵『飯岡村圖面』(明治初期)の「第貳拾五地割 字荒屋」には、第 5 次調査区や周辺、他図葉などの広範囲に「藤川清助」の名前が見える。都南歴史民俗資料館の『菖蒲田家系図(写)』によれば、屋号菖蒲田の藤川家は二代から九代まで清助を襲名し、六代は元治元(1864)年没、七代は慶応 4(1868)年没、八代は大正 3(1914)年没である。藤川家は広い土地を持つ有職者と考えられることから、慶応元(1865)年「當宗門改書上帳」の清助(恐らく七代)と『飯岡村圖面』の藤川清助(恐らく八代)は、代替わりした清助の可能性が高い。五代清助の項には、「南部利敬公…見前ニ今宮神社ヲ建立シ…今宮神社ニハ藤川氏祠官仰付ラレタリ。此ノ時始メテ藤川對馬政廣ト南部利敬公ヨリ拝領せり」の記載がある。『都南村誌』によれば、今宮神社は東見前にあったが明治 3 年に北野神社に迎社し、明治 35 年に北野神社飛地の東見前(現在地)に移転

したとある。今宮神社祠官藤川家と北野神社別当宮崎家の関係の深さがうかがえる。五代清助の項には「清水寺に田を寄進。宮崎頼光院に宅地続畠一切寄進」の記載も見える。広く土地を持っていた藤川清助が、清水寺や宮崎家に土地を提供したことがわかる。これらのことから、藤川清助が清水寺檀家内で力を持ち、自分の土地に清水寺白山大権現や祠官である今宮神社、宮崎家関係の修験者を住まわせた可能性がある。

森毅によれば、「俗別当とは、通常は百姓身分の俗人でありながら、自村のみじかな(原文ママ)社堂を管理する…社堂の草創に際しては近在の修験者を遷宮導師に迎えることが多かった。ここに修験者と俗別当との緊密な相互関係が結ばれた素地があり…」(森毅 1989・PP518) とあることから上記の推測ができる。

また、「淨念坊」という隠し念佛の導師が和賀方面にいたが、西見前や永井には見られない。

以上のことから、本遺跡の「ちょうえんぼう」について、次のようなことが推測できる。

- ・ ちょうえんぼう（長円坊）は、近世期の修験関係の一般的な名称のひとつである。
 - ・ 近世期の見前村と永井村は北野神社別当宮崎家の霞場だったため、宮崎家関係の修験者の可能性が高い。
 - ・ 明治期の地主は屋号菖蒲田の藤川家だった。藤川家は広く土地を持ち、慶応年間の清水寺檀家筆頭だった可能性があり、南部利敬の際には今宮神社の祠官に任じられた。清水寺や宮崎家に土地を寄進している。
 - ・ 北野神社、清水寺白山大権現、多賀神社、今宮神社、いずれかの修験者が宮崎家と藤川家によって招聘され、藤川家の土地に僧坊を営み、長円坊を名乗っていた、もしくは置かれた僧坊名だった可能性がある。
- 以上のことが伝承として、伝わっていると推察できる。ほかの名では無く長円坊の名前だけが残っていることから、特に人々の記憶に残る修験者だったのかも知れない。具体的な人物像等は不明だが、今後の資料調査により分かることも出てくる可能性があろう。

このような小さな地域伝承は、記録が無いことから一度忘れ去られると無かった物と同様になってしまふ。ちょうえんぼうの詳細は明らかにすることはできなかったが、本報告書に記録することで、地域の歴史の一端として保存継承できればと願う。

本稿執筆にあたり、誉田慶信氏（盛岡市文化財保護審議会会長、岩手県立大学）、大沼信忠氏（元盛岡市教育委員会）、そして特に都南歴史民俗資料館の藤川里恵氏から多大なる御教示を賜った。末筆ながら記して感謝申し上げる。

（今野公顕）

【参考文献】

- 青森県立図書館 1975『多門院文書』解題書目第五集
岩手県立図書館 1973『岩手史叢第1巻 内史畧(1)』岩手県文化財
愛護協会
岸昌一 2001『御領分社堂』南部領宗教関係資料1 (有)岩田書院
紫波町 1972『紫波町史 第1巻』
曹洞宗清水寺 1993『清水寺史』開創四百年記念刊行
高橋梵仙 1963『かくし念佛考 第一』巖南堂書店
都南村 1974『都南村史』
都南歴史民俗資料館 「飯岡村圖面」
都南歴史民俗資料館 「神社佛閣由緒世代書上帖 志和郡年行事自
光坊同行頼光院」
都南歴史民俗資料館 「都南の先人 宮崎求馬」関連資料
- 誉田慶信 2020『自光坊の歴史～一方井家所蔵自光坊修験関係資料と
自光坊』盛岡市文化財シリーズ第46集 盛岡市教育委員会
森毅 1975『南部藩の修験・山伏-南部藩領霞支配・堂舎の分布』
郷土史叢第1集 郷土史叢刊行会
森毅 1984『修験道資料史料自光坊文書』『Artes liberals』
岩手大学人文社会科学部紀要編集委員会 編
森毅 1989『修験道霞職の史的研究』名著出版
吉田長一郎 1988 調査報告「長園坊(宮崎家)跡と伝えられる」都南
歴史民俗資料館
吉田長一郎 1990『読み下し文 神社佛閣由緒世代書上帳』都南歴史
民俗資料館